キス

つきしろ

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=8699903

DQ11, ドラクエ11, カミュベロ, カミュ, ベロニカ, アラサーカミュベロ, DQ100users入り

カミュとベロニカをちゅうさせたかった。
という以前ベッターに上げたお話です。それだけだと少し短かったので後半にカミュ視点によるお話を追加しました。キスだけしてます。
アラサーカミュベロすてき。

キス

「はぁ。キスしてみたいなぁ」
「……へえ、そんなこと考えてたのか」

　突然背後から聞こえた声に珍しく読んでいた恋愛小説を慌てて閉じながら振り向くと、そこには現在一緒に旅をしながら世界を飛び回っている青い髪の青年がいた。ここはとある宿屋のベロニカが借りた部屋で、時刻は夜。夕食も終えた今当然鍵は閉めていたからすっかり油断していた。
　カミュは元盗賊故に鍵開けも気配を消して忍び寄ることもいともも簡単にこなす。だからといって何故ベロニカにそれをするのだと常々言ってるにも関わらずこの男はやめてくれない。びっくりさせるためだけにその技能を無駄使いするカミュが何を考えているのかさっぱりわからなかった。

「カミュ！　アンタ何度勝手に入るなって言えばわかるのよ！　着替えてたらどうすんのよ！」
「あー大丈夫大丈夫、お子様には興味ねえから」
「アンタがよくてもあたしが嫌なの！　とにかく出ていって！」

　椅子から立ち上がり無理やり押し出そうとするが、なんせカミュは大人の男である。もっと言えば29歳である。自身もそれくらいの年齢だが色々あって16歳の肉体しかもたないベロニカが力で敵うはずがなく、どれだけ押してもびくともしない。

「で、キスがなんだって？」

　そして誤魔化されてもくれない。

　ニヤリとからかうように言われればさすがにバツが悪くなりベロニカは押すのを諦めてカミュに背中を向けると、この状況をどう切

り抜けるべきか思案した。しかしそうしてる間にも背中に受けるちりちりした視線は外れそうにもなく、結局己の迂闊さを呪いながら渋々と白状せざるをえなかった。

「……べつに。ただ、キスしてみたいなって言っただけよ」
「まだしたことねえのか」

　ぼそりと言われて、ベロニカはムッとなる。

「うるさいわね。あのラムダに理想の人なんて早々こないしそもそもそれどころじゃなかったからね。そのあとはアンタも知っての通り、旅に出てお子様の姿になってそのまま戻れなかったから想い人がいたって眼中にもないでしょ。でもあたしこの間の誕生日で身体は16になって成人したから、まあ、その、ちょっと思っただけ。これで満足？」

　一気に喋ったので酸素が足りなくなってしまった。
　心臓が嫌な音を立てていることに下唇を噛みながら、いつもなら簡単にその顔を見ることができるのに振り返ることが怖くてしょうがない。ちりちりする視線はいつの間にかベロニカを絡めとるかのように全身に広がっていて、どうしようもなく落ち着かなくなった。

「想い人？」
「……例え話だってば。ほらもう別にいいでしょ、用でもあるんじゃないの」
「なら、オレとするか」
「…………」

　心臓がひと際大きく鳴った。
　ああたぶん、心のどこかでカミュがこう言うことを恐れていたのかもしれない。

カミュとはただの旅の仲間だし、そもそもベロニカの姿は幼かったから今まで色恋沙汰なんて発生するはずもなかった。
　けれどこの時カミュがそう言うのではないかという予感があったのはようやく成人を迎えたせいかもしれない。そしてそう言われたベロニカが何と答えるかくらい、カミュならわかりそうなものなのに。

　どうなるかわかってても答えるべきなのか。
　それともとぼけたほうが良いのか。

　不自然ではない程度に迷った末、ベロニカはぎゅっと手を握りしめるとできる限り平静を装って答えた。

「……へー、そこまで言うならアンタは経験あるんでしょうね」
「おー。安心しろつい最近もしたばかりだよ。29歳ナメんな」
「はいはいおっさん。わかった、じゃアンタで我慢してあげる」

　イライラするのは『つい最近キスをした相手』に負けたくなかったからなのか。
　意を決してベロニカは振り向いた。

　世界に平和が訪れてから十年もの間、一緒に旅を続けてきた。長く一緒にいればいつか何かの間違いでこういう事も起こるのかなとは思っていたが、まさかこんな売り言葉に買い言葉ですることになるとは考えてもみなかった。

　古ぼけた宿屋の一室で2人は向き合い、カミュの両手はベロニカの肩に置かれている。内心怯えていることを悟られたくなくて、ベロ

ニカは睨むようにカミュの顔を見ていた。カミュはと言えばいつものようにどこか飄々とこちらを見下ろしているだけで、それが経験者の余裕を思わせて胸が苦しくなった。

「……じゃあ」

　両手に力が入り顔が近づいてくる。
　心の準備が整う間もなく、ベロニカは反射的に目を閉じた。

「…………？」

　しかし、いつまで待ってもそれは訪れない。けれど両肩は掴まれてるし、すぐ近くに気配はあるからどうしたものかとそろそろと目を開ければ、そこには青い瞳がいっぱいに広がっていた。まるで獲物が寄ってくるのを待つ狼のようだった。

「目、閉じんな。相手がオレだってのちゃんと見てろ」

　次の瞬間、何か言おうと口から飛び出しかけた言葉は奪われてやわらかな感触が唇に押し付けられた。近すぎてぼやける青い目は情欲に濡れているのに何故かキスはやさしくて、そのギャップにどんどん頭が痺れていった。カミュと、キスをしている。どこか他人事のように見ている自分がいるのに、それを触れ合ってる部分は許し

てくれない。
　——長いようにも感じたが実際はほんの一瞬だったのかもしれない。唇が離れ、ほっとして止めていた息を吐きだしたその瞬間、今度は角度を変えて唇を塞がれた。

「ん」

　思わず鼻から抜けるような声が漏れて泣きそうになってしまう。だからぎゅっと目を閉じて身体を突き放そうとした。

「い、息が」
「鼻からすればいいから」
「でも」
「目。閉じんな」
「んんっ」

　また押し付けられる。カミュの手がベロニカの腰と後頭部にまわり、身動きがとれない。

　こんなつもりじゃなかった。ただ、ちょっと小鳥のようなキスをして、なんだこんなものかーって笑って終わるつもりだった。それなのにこんなキスをされたら、とてもじゃないけど今までと同じようになんてできそうもない。
　初めて感じる甘さに溺れてしまいそうだった。このまま離れたくなくなってしまう。なんで。こんな。どうして。
　わけがわからなくて涙が滲み出した頃、カミュは不意にキスを止めてベロニカを覗き込むと神妙に呟いた。

「……悪かった」
「っ、ア、アンタね、こんなことしておいて、タダじゃ」
「そうじゃなくてたぶんオレお前にキスすんの10回目くらいなんだ」
「は……？」

「いや、宿屋の鍵って簡単に開けられるし、まああと野宿の時とか」
「は………………？」

　何を言ってるのか全く意味がわからない。涙も引っ込んでしまって目の前の男が言おうとしていることの意味を必死で理解しようとするが、いつもはよく回るはずの頭が全く機能しない。
　10回目？　そんなの知らない。全然知らない。
　頭が混乱しているベロニカをよそにカミュは悪びれた様子もなく、その腰を抱いたまましゃあしゃあと言い放つ。

「いつからしてたかは秘密にさせてくれ。中身の年齢は大して変わらねえはずだしセーフだセーフ」
「な、なに、勝手に……！」
「お前もオレのこと好きだろ？」

　ニヤリと自信満々にそう言われたら、言おうとしていた文句も全て吹き飛んでしまった。
　なんだこいつは。ずっとずっと、小さな身体のまま悩んでいたのに。
　きっとキスしたいと思っていた相手がカミュだったことも最初から全部バレていたに違いない。となるとカミュにうまいこと乗せられてしまったのだろう、恥ずかしさに思わず頭を抱えたくなってしまった。

　けれど、今は一番伝えなければならないことを言わねばならない。

「～～～～好きよ、バカ！」
「おう。じゃ、続きな」

　カミュがうれしそうに笑ってベロニカを引き寄せるから、首に手を回して今度はこっちからキスしてやった。

初めはほんの出来心だった。

　世界に平和が訪れたあと、カミュとベロニカは二人で旅に出ていた。最初はマヤもいたが本人の希望でメダル女学院へと通うことになり、それからはずっと二人だった。
　ベロニカの旅の目的は「もとの姿に戻ること」。しかし自力ではそれが無理だということを早々に悟るとカミュのトレジャーハントに一縷の望みをかけるようになった。こうして二人は世界中を駆け巡っていた。

「……眠い」

　火の番の交代で夜中にベロニカを起こすと、彼女は重いまぶたをこすりながら夢現にそう言った。ベロニカの体力を考えて普段はなるべく宿に泊まるようにしているが、今日は依頼の都合上、どうしても野宿せざるをえなかった。
　モンスターは女神像のおかげで近寄ってこないが火だけは誰かが見ていないといけない。

「昼間あんだけ魔法使ったもんな。まだ寝とけ」
「ごめ……カミュ……」

　すうすうと寝息が続き、カミュはすぐ側でうずくまって再び眠りに落ちたベロニカに毛布を掛け直した。

　ぱちぱちと木の爆ぜる音だけが静かな空間に響いていた。夜は元盗賊としての感覚がどんどん研ぎ澄まされる。無意識に周囲の様子

を探るも辺りには自分たち以外の気配は感じられず、今のところはトラブルも起きそうにない。
　武器の手入れは終わっているし、明日の予定の確認も済んでいる。読書をする気分でもないためコーヒーを飲みながらなんとなく夜空を眺めて時間をつぶしていたが、次第にそれも飽きてしまいカミュはふと隣に視線を落とした。

　旅を始めた頃はまだ小さかったその姿は、ゆっくりと階段をのぼるように大人へと近づいている。中身は歴とした女だが、手を出すにはまだ早いとカミュは思っていた。だがこうしてどこかへ逃げないように取り囲みつつなんとか二人旅を続けてはいるものの、何かのきっかけで離れていく可能性は十分あった。実際これまでにも何度かパーティ解散の危機は迎えていて、そのたびにどうにかして繋ぎ止めて、我ながら情けないが成人を迎えるまではとひたすら耐えていた。安易に手を出して逃げられてはたまらないし、手放して誰かにかっさらわれてもたまらない。

　ベロニカはおそらく自分のことを好きだろうというなんとも頼りない予想だけが、今のカミュを支えている。元の姿に戻るならリーズレットあたりと組んで魔法の研究でもしたほうが現実的であるのに、彼女はそれをしなかった。カミュを選んだ。それは元仲間だから、という理由だけではないと思いたかった。

　ゆっくりと手を伸ばし目にかかる金の前髪を払ってやれば、くすぐったそうにふわりと笑う。それを穏やかな気持ちで見ていると緩んだ唇から不意に小さな声が漏れた。

「……ん……カミュ……」

　甘えたように自分の名を呼ぶその声がまるで誘惑するようにひっそりと耳に忍び込んできて、心臓がぎゅっと締め付けられた。金の髪、長いまつげ、なめらかな肌、そして僅かに開かれた唇。魅入ら

れたようにそこから視線を外せなくなり、ごくり、と喉が鳴った。
　出会った頃のベロニカは小さかった、それこそ幼児と言っても差支えないほどの年齢だったはずだ。けれど今目の前で眠りこけてる少女はいつの間にか随分と歳を重ねていて、まるでそれが初めて知った事実であるかのように胸をざわつかせた。
　普段は厳重にふたを閉め鍵までかけているものが突然カタカタと暴れ出す。ああ。そろそろ限界が近いのかもしれない――

「…………っ」

　…………理性は揺らいでしまった。この時初めて衝動的に顔を寄せてその小さな唇にそっと触れてしまった。力が入らない唇はただカミュを受け入れるだけで、それ以上の反応は何もない。すぐに離れたものの物足りなく感じてまた触れようと顔を近づけたところで、何も知らずに眠り続けるベロニカに強烈な罪悪感を抱いてそれ以上は辛うじて踏みとどまった。

「……なにやってんだオレは」

　口元に手をあてて嘆く。けれども、一度犯してしまった罪は想像以上に甘美な毒だった。ずっと大事にしてきたのに、ただ寝言で名前を呼ばれただけでこうなってしまうなんて未熟にもほどがあるが、その日以来鍵は鍵としての機能を果たさなくなり、眠っているベロニカにこそこそと口づけを繰り返していた。バレたら終わりなのに止められなかった。
　そうしないと何かの拍子でもっと酷いことをしてしまいそうだと、己に言い訳をしていた。

　――そんなカミュが。

「キスしてみたいなぁ」と呑気に呟いていたベロニカを煽ってうまいこと自分とキスするように仕向けたのはいいものの、触れ合う直前にしっかりとその目を閉じられた瞬間、いつもの彼女を思い出して固まってしまったのも無理はない。それでは今までのキスと何ら変わらない。こそこそと罪悪感に苛まれながら罪を犯していたカミュのことなんて全く知らずに、無邪気に、そして無防備に居続けた彼女にはきちんとわからせなければいけなかった。

いつまで経ってもそれがこないことを疑問に思ったのか、ベロニカが恐る恐る瞼を開ける。そしてカミュはその瞳を素早く捕らえる。

「目、閉じんな。相手がオレだってのちゃんと見てろ」

低く言えば身体がびくりと震え、唇に力が篭るのが見てとれた。そうだ、それでいいと、ぞくぞくしながら今度こそその唇に自分のものを押し付ける。ただ受け入れるだけだったその唇からはゆるゆると押し返されるような弾力を感じてざわりと肌が泡立った。怯えるように開かれたままの紫の瞳に欲が剥き出しになった自分の姿が映り、誰と今それをしているのかを彼女は否が応にも考えずにはいられないはずだ。

じっとそのまま見つめて唇の感触を味わいたかったが、残っていた理性でなんとか引き剥がす。けれど離した途端再びその唇に引き寄せられた。呼吸を奪われたベロニカが鼻の抜けるような声をあげて、カミュの脳内を痺れさせる。貪るような真似はしなかったが、触れ合うことを止められない。角度を変えながら上唇とやさしくついばむとベロニカが弱々しく胸を突き放そうとして、その反応すらも今のカミュを煽るだけだった。

「い、息が」
「鼻からすればいいから」

「でも」
「目。閉じんな」
「んんっ」

　細い腰と後頭部に手を回す。ベロニカはもう目を開けていなかった。十分にわかっただろうからもうそれでいい。

　――何年、この時を待ち続けていたのだろう。決定的に変わるこの瞬間を。お子様だと言い続けたベロニカを大人扱いする日を。
　だからカミュは唇を離したあと、息も絶え絶えなベロニカに向かって何年もの間秘密にしていたことをそっと打ち明けた。

*
*
*

「……えっ！？」

　耳元で甲高い声がしてカミュは一瞬で覚醒した。カーテンの隙間から差し込む陽の光に目を細めながら横を見ると、伸ばした右腕にちょこんと乗っかっている金色の頭が視界に入る。すすすと視線を下ろしその顔を覗き込めばベロニカは青くなりながらこちらを見上げた。そして目がしっかり合って三秒後、突然がばっと勢いよく身体を起こすと自分の姿を慌ただしく確認し始めた。

「なんだよベロニカ、もうちょっと寝て……」
「服、着てる……」

ほっとしているベロニカを見て、ああそうか、とカミュは思う。目が覚めたら男と一緒に一つのベッドで寝ていてしかも腕枕されていたのだ。しかし心の奥底から安堵している姿がなんとなくおもしろくなくて、長時間人の頭を乗せていたせいで痛む右腕を屈伸させながら不機嫌に言い放つ。

「何もしてねえよ」

　あの後しぬほどキスをしまくってへろへろになったベロニカをまんまとベッドに引きずり込んだはいいものの、脳が限界値を越えたのか横たえた瞬間うとうとと意識を手放そうとする姿に「マジかっ！？」と思わず叫んでしまったなんて言えない。
　すやすやと眠るベロニカを前にさすがのカミュもそれ以上は求めるわけにもいかず、せめてとその身体を抱きしめながら布団をかぶる。生殺し状態だがそれくらい今までの苦行を思えば余裕の余裕、むしろ触れられるだけで満足だと強力な暗示を自らにかけて一夜を過ごした。眠れなかったけど。眠れなかったけれど。

「じゃあなんでアンタは裸なのよ！」

　あくびを一つしたところでベロニカが顔を真っ赤にしてそう言った。確かに裸だが、上半身だけである。カミュはしれっと答えてみせた。

「暑かったから」
「あ、暑いからって、なんで、なんで、勝手に脱ぐのよ！　早く服着てよ！　えっち！　変態！」
「そいつは聞けねえなあ」
「なんでよ！」
「照れてんのがかわいいから」
「はあっ……！？」
「はあ！？て言ってるのもかわいい」
「…………っ、！？！？！？！？」

頭から湯気がでてるのではないかというほど真っ赤になって何か言い返そうと口を開いているが、言葉が出ずに金魚のようにぱくぱくしている。かわいい。かわいすぎる。こんな姿を見るのは初めてだし、そうさせているのは他でもない自分なのだと思うと皮膚がむずむずしてきた。気持ちは通じたし今までのように年齢も気にすることはない。ああなんて素晴らしい朝なんだろう。

　枕に片肘をついて上半身を起こし、さてこれからどうしようかと上機嫌でカミュが笑みを浮かべていると、ふいっと視線を逸らされてしまった。どうやら機嫌を損ねてしまったらしく、ぶつくさと文句を言っている。

「……アンタこんなヤツだったっけ？」
「修行僧みたいな生活してたからな」
「勝手にキスなんてして」
「ちゃんと謝ったろ」
「……そんなにあたしのこと好きだったんだ？」

　ようやく一本取れそうな良い返しを思いついたのか、ちらりとこちらを見たベロニカがからかうように言った。確かに今までの関係なら「そんなんじゃねえよお子様！」などと言って話を逸らしただろうから、そうやって困らせることもできたかもしれない。

　何故か自信満々に口元に笑みを浮かべている彼女に、どうして普段はあんなに頭が回るのにこうも抜けてるんだろうと疑問に思いながらも、その隙をいただいても良い立場に昇格したカミュは無言でその手を引っ張って布団の中に引きずり込んだ。あっさり倒れ込んだベロニカが慌てた声を上げるかもう遅い。

「ちょ、やだっ！」
「あー。大人しくしろって」

　ばたばたと抵抗する両手をシーツに縫い付ければいとも簡単にベ

ロニカを組み敷いてしまう。それでも勝気な瞳は怯むことなく、あまつさえ攻撃魔法を紡ごうとするからその生意気な唇に噛みつくようなキスをして封じ込めた。深まるにつれてベロニカの身体から力が抜け、瞼がゆっくりと閉じられる。抵抗する素振りはもうない。受け入れられていることを実感して頭がおかしくなりそうだった。
　大人しくなったのでやさしくついばむようにキスを繰り返して味わうようにぺろりと舐め上げれば、ベロニカは小さく悲鳴をあげる。それでも抵抗はしない。鼻から息をすることを覚えた彼女が時折漏らす声が思考力を奪ってゆく。溺れてゆく。もう今までのようなキスではない。

「……そうだよ、頭おかしくなるくらいお前のことがずっと好きだったんだよ。だからこれから覚悟しとけな」

　熱に浮かされるように耳元でそう呟くと、上気したその頬にもキスを落とした。